



令和5年の干支「卯」、その十二生肖の「兔（ウサギ）」が鏡に表されています。

月の兔は「餅（もち）」を搗いていない。

月宮図鏡は鏡形を満月に見立て、鏡背に唐時代に伝わる「不死」・「再生」にまつわる月の伝説を図像で表現した鏡です。鏡の右下には、前足に豎杵（たてぎね）を持ち、後足で立つ兔がいます。兔は脚台上の壺の中を搗（つ）いているように見えます。日本では、月には兔がいて餅をついている、と言われますが、古代中国では月の兔は「仙薬＝不死の薬」を搗いていると考えられていました。

古代中国の月にまつわる「姮娥伝説」

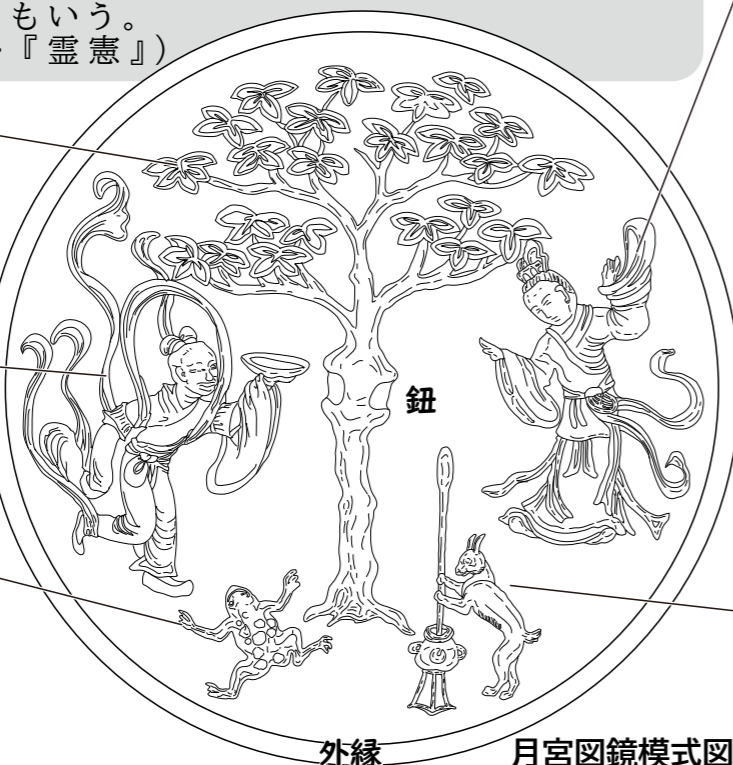
弓の名手である羿（げい）は、不老不死を司る神仙の西王母（せいおうぼ）から不死の薬を貰い受けた。羿の妻の姮娥（こうが）※は、その薬を盗み、月へ逃げて身を託したが、蟾蜍（せんじょ）＝ヒキガエルになったという。  
※嫦娥（じょうが）ともいう。  
（『淮南子』覽冥訓・『靈憲』）

冠をつけた女性  
不老不死を司る神仙の西王母か？裳裾を広げて帯を翻し、兔を指示するかのよう両手を掲げる。

月桂（げっけい）  
月の中には高さ500丈（唐時代の1丈＝3.6m）の桂の木があり、切ってもそこから塞がり、再生するという。  
（『酉陽雜俎』巻一「天咫」）

双角の鬚を結った女性  
夫から不死の薬を盗み、月に逃げた妻の姮娥か？羽衣をまとうて天より降り立つ仙女のように表される。

蟾蜍（せんじょ）  
飛びつくように四肢を広げる。不死の薬を盗んで月に逃げた姮娥がヒキガエルになったという。



仙薬を搗く兔  
後足で立ち、前足で豎杵を持って壺中を搗き、侍者として西王母のために仙薬＝不死の薬を作る。

月の兔はなぜ豎杵を搗く姿なのか？

兔は姮娥伝説に登場しませんが、不老不死を司る神仙の西王母と関わります。漢時代（紀元前3世紀～後3世紀）、兔は西王母の侍者として豎杵で搗く姿が同じ画面に表されることが多く、西王母のために不死の薬を作っていると考えられています。同時代には、月中に蟾蜍と兔がいるとも考えられており（※『論衡』「説日」等）、月輪の内に走る姿の兔が蟾蜍と一緒に描かれました。兔のなかには豎杵で搗く姿もあり、月で西王母の不死の薬を作る様子を表したといえます。

月の中に兔がいる理由

戦国時代（紀元前5世紀～前3世紀）の詩に月の兔に関する一節があります。『楚辞』天問訓の一節（※典拠：小南一郎氏訳註2021『楚辞』岩波書店）  
「夜光（月）にはいかなる徳（生命力）があって、死んでもまた再生するのか、何の利益があって、[月は]顧兔（うさぎ）をお腹に容れているのか」  
この詩は、月が満ちては欠けて再び満ちる様子を、死んでも再び生き返る「不死」・「再生」の性質と捉えています。そして、月中に兔がいる「利益」については、月が欠けるのは蛙が月を食べてしまうからという漢時代の考え（※『淮南子』説林訓）を踏まえると、西王母の不死の薬を作る役割が兔にあるように、月が再生して再び満ちるために必要な徳（生命力）を兔がもたらすことと考えられます。

げつきゅうずきょう  
月宮図鏡  
鏡に表された  
「月の伝説」

えと  
干支  
卯  
う / ボウ



千石コレクション  
図録289/唐時代/8世紀

仙薬を搗く

月の兔  
うさぎ

令和5年1月2日（月）～3月12日（日）

兵庫県立考古博物館 加西分館

古代鏡展示館  
Hyogo Prefectural Museum of Ancient Bronze Mirrors

〒679-0106 兵庫県加西市豊倉町飯森1282-1（兵庫県立フラワーセンター内）  
TEL：0790-47-2212 URL：〈HP〉<https://www.hyogo-koukohaku.jp/kodaikyou/>  
FAX：0790-47-2213 〈blog〉<https://kodaikyou.blogspot.com/>



